

若者の余暇・消費活動への影響要因の把握に関する研究

秋田大学 学生会員 ○草薨 一樹
秋田大学大学院 正 会 員 鈴木 雄
秋田大学大学院 正 会 員 日野 智

1. はじめに

最近の若者の外出頻度・出費が減少している。少子高齢社会となった現代においても、これからの将来を担う若者世代の外出頻度や消費活動が減少した場合、都市や地域の活力衰退に深刻な影響を及ぼすと考えられる。若者の外出頻度が増加することで消費活動も増え、地域の活性化につながることを期待される。しかしながら、大学生の部活・サークルへの参加率が1995年では49.8%だったのに対し、2000年には40.8%と減少しているともされている。本研究では、交友関係や部活・サークル・アルバイトなどへの参加が大学生などの若者の外出行動に大きく影響すると考え、その要因の把握を目的とした。

2. 調査の概要

大学生の部活・サークルに所属するきっかけや参加することによる生成原単位の増加や効果を把握するために学生に意識調査とPT調査を実施した。また、学生時代の部活・サークルやアルバイトへ参加することが大人になってからの活動へ影響することを示すために、20代・30代の住民に対して意識調査を実施した。学生に対しては、秋田大学生から147部を回収し、また、PT調査も秋田大学生に実施し、43部を回収した。住民に対しては、投函配布・郵送回収方式で44部回収した。

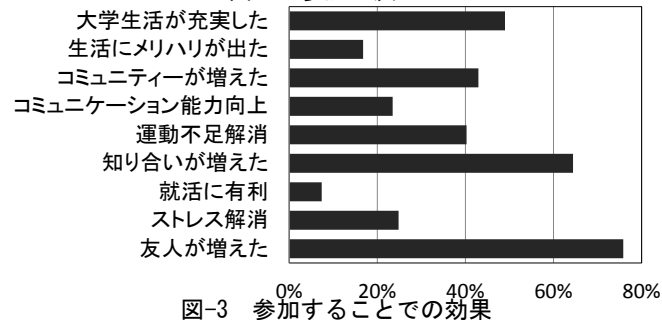
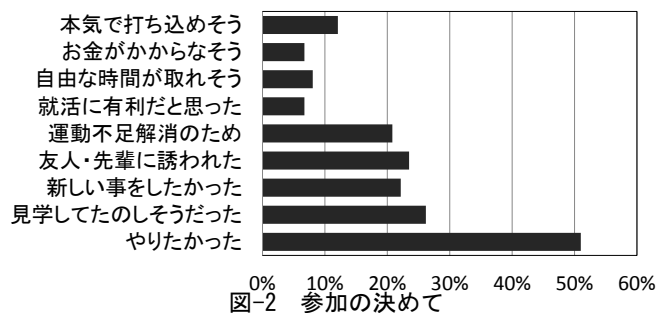
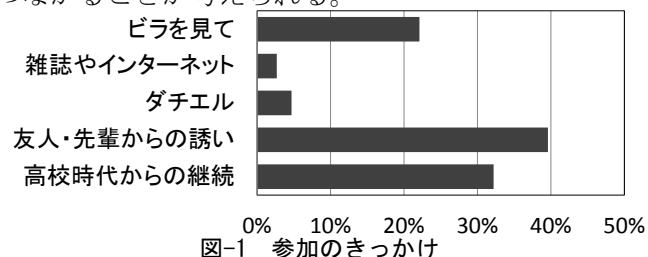
3. 大学生の外出行動と部活・サークルへの参加

(1)部活・サークルやアルバイトへの参加状況

調査の結果、大学生の被験者のうち59%が部活・サークルとアルバイトの両方を行っている。一方、12%が両方行っていない。「参加のきっかけ」を図-1に、「参加の決めて」を図-2に、「参加することでの効果」を図-3に示す。

部活・サークルへ参加するきっかけとして「友人・先輩からの誘い」が最も大きい。参加のきめてとしては「やりたいかどうか」が最も多く、最終的に本

人の意思が重要であることがわかった。また「お金がかからなそう」とした回答が少なかったことから、参加することによる出費の増加はさほど気にならないといえる。参加することでの効果では、友達・知人が増えたとする回答が最も多く、知り合いが増えることで知り合いの輪が広がり、外出のきっかけにつながる考えられる。



(2)PT調査による生成原単位の算出

本研究では、部活・サークル・アルバイト等の有無による生成原単位の違いを明らかにするためパースントリップ調査（以下PT調査）を行った。その結果、部活・サークルとアルバイトを両方行っている被験者の生成原単位が4.27と最も高く、これは予想した通りであった。しかし、両方行っていない被験者の生成原単位も3.78と高くなっている。これは、

キーワード：意識調査分析、都市計画、余暇活動、消費活動、生成原単位、若者

連絡先：〒010-8502 秋田県秋田市手形学園町 1-1 TEL(018)-889-2359 FAX(018)-889-2975

サークルやアルバイトを行っていないために余裕があり、外出につながっていることが推測される。

表-1 部活・サークル×アルバイトの有無と生成原単位

	部活等をやってる日	部活等をやってない日
バイトをやっている日	4.27	3.48
バイトをやっていない日	3.60	3.78

部活・サークルやアルバイトへ行く際のトリップを除外して比較するため、部活・サークルやアルバイトがない日の生成原単位を比較した。その結果、部活等に参加している被験者は 3.62、参加していない被験者は 2.79 となり、参加している場合の方が高いことが明らかとなった(図-4)。PT 調査において、バイト後には 26%の被験者が、部活等後では 56%の被験者が友人・知人と一緒に外出したり、食事に行ったりしている。すなわち、部活に参加することで新たなトリップが派生していることがわかる。

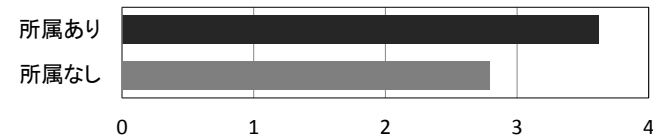


図-4 部活やバイトのない日の生成原単位と部活等への所属の有無

また、部活・サークルへの参加状況についての調査において、活動費が年平均 27,000 円かかっており、平均で 2 週間に 1 回のペースで飲み会に参加していることもわかった。このことは学生にとって金銭的負担となるが、消費活動が活発になるとも言える。

4. 学生時代の活動と社会人の外出行動

住民を対象に、現在の遊びに行く頻度に影響する要因の分析を行う。被験者の半数が、現在、遊びに行く頻度が高いと回答した(図-5)。遊びに行く頻度を外的基準とし、学生時代の経験をアイテムとして、数量化理論Ⅱ類による分析を行った(図-6)。分析の結果、「部活等に力を入れていた方だ」という項目のレンジ値が高く、現在の遊びに行く頻度に影響していることがわかる。すなわち、学生時代の部活・サークルへの参加が社会人となった際の外出行動に影響していると推測される。

また、学生時代に部活・サークルに力を入れていた被験者とそうではない被験者とを比較した場合、現在も付き合いのある友人の数について、部活・サークルに力を入れていた被験者の方が、多い結果となった(表-2)。学生時代の部活・サークル活動が卒業後の友人関係に影響していることがわかる。また、

「趣味が多い」についても「そう思う」と回答した割合が高かった。

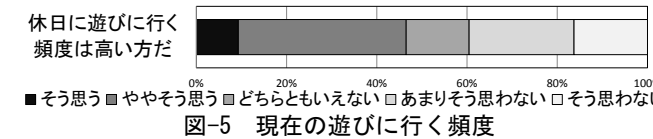


図-5 現在の遊びに行く頻度

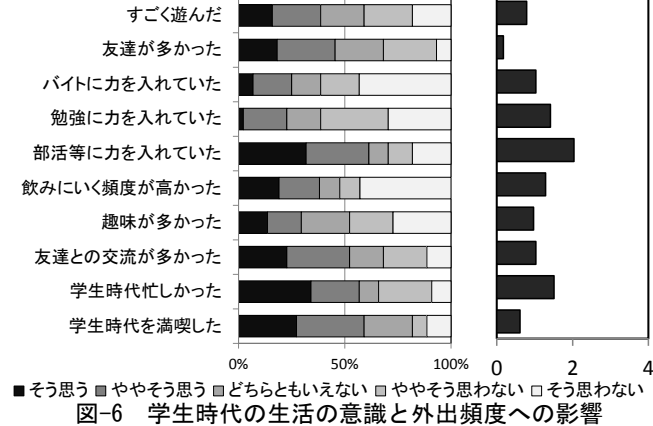
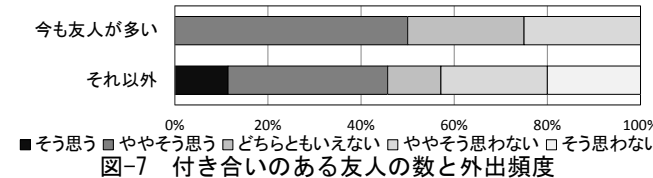


表-2 学生時代の部活・サークルへの取り組み方と今も付き合いのある平均の友人数

	力を入れていた	それ以外
今も付き合いのある友人の数	11.04	6.94

付き合いのある友人の数と外出頻度の高さについても分析を行った(図-7)。その結果、付き合いのある友人が多いと答えた被験者の方が「そう思う」、「ややそう思う」の割合が高く、「ややそう思わない」、「そう思わない」の割合が低い。このことから、友人が多いことで人付き合いが増え、外出頻度に影響を与えることがわかる。



5. おわりに

学生時代に部活・サークル・バイトに積極的に取り組むことで、大人になってからの活動への影響があるということが明らかとなった。現在の大学生への調査からは、部活・サークルに参加し、アルバイトをすることで外出や消費活動の頻度が高くなる事がわかった。また、社会人の調査から、部活等に参加していた人は卒業後も付き合いのある知人が多く、このことが生活の満足度や外出の頻度にも影響することもわかった。将来的にも外出頻度、消費活動の増加へつながると考えられるため、部活等への参加率が減少している中で、部活等に参加を促すことに意味があると考えられる。